



館内・庭園散歩

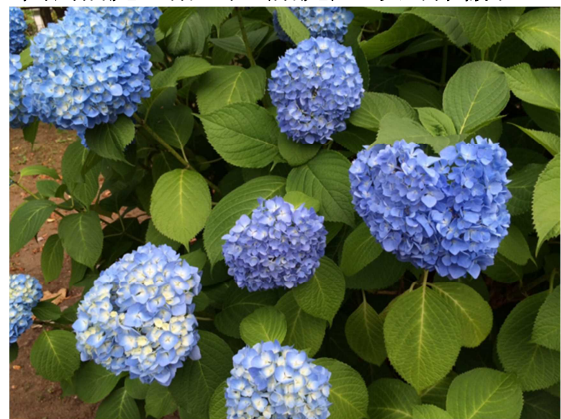
＜憲政記念館のあれこれ＞



完成間近の尾崎記念会館。左奥の建物は参議院議員会館（1959 年（昭和 34）頃）。

尾崎記念会館の設計は公募により、海老原一郎氏の案が選ばれた。1 億円を超える建設費は財界や広く国民からの募金による。特筆すべきは、天皇陛下が金一封を建設基金として御下賜され、宮内庁長官は前例がないと説明したことである。その他、多くが寄贈によるもので、例えば、尾崎行雄の生まれ故郷の相模川上流から運ばれた池の飛び石や、等身大の尾崎行雄銅像（朝倉文夫作）の銅などがある。落成式は 1960 年（昭和 35）2 月 25 日、清瀬一郎衆議院議長主催のもと尾崎家、岸信介内閣総理大臣等が出席し盛大に行われた。同年 3 月 1 日、衆議院に目録が贈呈され寄贈された。

＜国会前庭の南地区（南庭）で咲く紫陽花＞



〔5月下旬撮影〕

憲政記念館が管理する国会前庭には多くの樹木や花があり、来園者の目を楽ませている。特にこの時期は新緑に彩られた景色が展開し、開花のシーズンを迎えた紫陽花の美しさが特に際立っている。国会前庭の北地区（北庭）には日本水準原点が設置されており、その周辺も紫陽花を見るポイントとなっている。花の色は土壌が酸性なら青、アルカリ性なら赤になるようで、土の性質によって変化するそうだ。

国会議事堂の前庭としての品位と、国会周辺の貴重なオアシスとの役割を兼ね備えるべく、今後ともその整備に努めて参りたい。

平成 27 年特別展のご案内

平成 27 年の特別展は、『戦後復興への道のり—吉田茂・鳩山一郎—』特別展と題し、戦後日本の進路を決定した時期を中心に吉田茂・鳩山一郎らに焦点を当て、戦前から高度経済成長期に至るまでの激動の時代を、諸相とともに関係資料により紹介することとなった。開催期間等は右のとおりである。

皆様にご満足いただける特別展となるよう、準備を進めている。館員一同、皆様のご来館を心よりお待ち申し上げる次第である。



〔吉田茂〕



〔鳩山一郎〕

開催期間	11 月 4 日（水）～11 月 27 日（金）の 24 日間 ※11 月 4 日（水）は 13:00 から開催
開館時間	9:30～17:00 ※入館は 16:30 まで
備 考	期間中無休 入館無料

常設展企画展示のご案内

1 階中央ホール

企画展示「議事堂の歩み」展（～10 月上旬まで）

1890 年（明治 23）11 月 25 日、帝国議会が召集され、初めて誕生した衆議院議員 300 人が麹町区内幸町に新築されたばかりの木造の仮議事堂に登院。29 日には貴族院議場において、第 1 回帝国議会の開院式が行われた。政治の舞台となった第 1 次仮議事堂から現在の国会議事堂に至るまでの姿を写真パネル等で紹介。

2 階展示室（壁面コーナー）

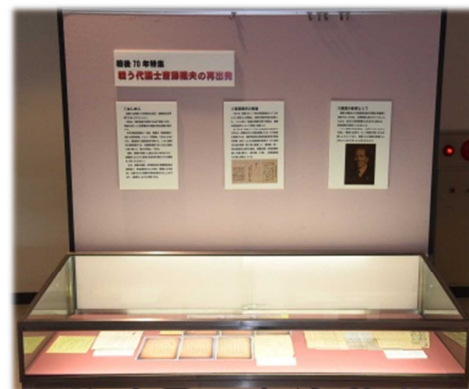
企画展示「新収蔵資料」展（7 月 1 日～10 月上旬まで）

新たに当館に寄贈された資料のうち、書軸、色紙、絵画、彫塑等を展示。主な展示資料は中曽根康弘条幅、安倍晋三色紙、加藤友三郎元帥徽章等（加藤は p.4 参照）

2 階展示室

ミニ企画展示「戦後 70 年特集 戦う代議士斎藤隆夫の再出発」展（～9 月上旬まで）

戦後 70 年の特集として、戦前憲政の危機には必ず演説に立ち、警鐘を鳴らし、除名処分にも翼賛選挙にも屈しなかった「戦う代議士」斎藤隆夫。終戦の現実を受け止めなおも政治の道を歩んだ姿勢を紹介。



憲政の十傑 一板垣退助一



〔高知城址にある板垣退助銅像〕

【略歴】

1837 年（天保 8）高知で上士の子として生まれる。維新前夜、藩論を武力討幕に導く。甲州攻略で乾から板垣に改姓。新政府では参議となるが、1873 年（明治 6）征韓論争に敗れて下野。民撰議院設立を建白し、自由民権運動の雄となった。後半生は社会改良運動、台湾の参政権運動に影響を及ぼした。1919 年（大正 8）没。

【憲政において果たした功績】

先駆者であること

『自由党史』によると、板垣は会津戦争で士族に協力しない農民の姿に衝撃を受けた。このような封建制では一国の独立が保てないと、日本全体の課題として捉えたのは鋭かった。1874 年（明治 7）板垣らは民撰議院設立建白書を政府左院に提出した。「政治は公議で決めよ。議会をつくれ」という主張は、士族や豪農・豪商の参政権を求めたこともあいまって大運動になった。彼は高知で立志社設立に加わる。立志社は初め反政府的な色彩もあったが、次第に国会開設運動や私擬憲法の作成など、民権運動の指導的立場になった。1881 年（明治 14）国会開設の勅諭が出されると自由党総理に推され、

立憲政治をめざす全国組織をつくった。一方で彼は英国政治を理想としていたが、大隈重信も自由民権運動に加わると、先鋭的なフランス政治思想に傾斜していった。

政党のバックボーンとして

それらもあって政府は板垣を危険視し、幾度か懐柔策をとった。例えば、伯爵位を授けようとするが、彼は権門（けんもん）は国のためにならないと再三辞退し、周囲の説得により、一代限りで受けたのは有名な話である。また明治天皇から貴族院議員に推されたが「貴族院外にあって政党に拠り、立憲政治のために尽くす」と言って辞退した。彼は衆議院に議席を置かなかったが、傘下の議員を常に鼓舞していたという。予算先議権を持つ衆議院に影響力を有し、藩閥中心の時代にあって 3 度の入閣を果たした。彼は本来の意味での政党政治を実現させたわけではない。しかし、彼の政党の系譜は立憲政友会に引き継がれ、明治・大正・昭和の三代にわたる大政党であり続けた。そして大正末期から、政党政治の一時代を築き上げるのである。

【エピソード】

子どもの頃、自宅門前にいる乳飲み子を抱えた貧しい女性を哀れみ、姉の着物をあげてしまった。姉にひどく怒られた板垣は、わずかに着物 1 枚を恵んで何が惜しいものかと言いつつ返した。それを聞いていた母は、この子はきっと家名を上げるに違いないと褒めたといわれる。

憲政記念館所蔵資料紹介

【新たに寄贈された資料】

①尾崎行雄胸像 古田敬二作



②加藤友三郎勲章 元帥徽章



※以上2点は、7月からの企画展示「新収蔵資料」展に出陳される予定。

【板垣退助資料】

①錦絵「建白御評議之図」李邑画



②錦絵「板垣君遭難之図」一陽斎豊宣



※「憲政の十傑－板垣退助－」(p. 3)
関連の所蔵資料。

< 編集後記 >

今号の「憲政の十傑」では、板垣退助を取り上げました。そこで、この稿を執筆した I 学芸員に聞いた話。

あの有名な「板垣死すとも自由は死せず」の言葉を発したとされる岐阜での遭難の後日譚です（この頁の錦絵でも紹介しています）。板垣みずから無期徒刑となった刺客相原尚娶の特赦を求めました。その後出獄した相原は、謝罪のため板垣のもとを訪れます。そのとき板垣は、「今後とも私の行動が真に国家に害あるときは、再び刃を向けられようと決して構わない。」と答えたということです。

人間の器の大きさがなんとも破格というか…。

(吉岡)

【発行人】 清水 敦

【編集責任者】 高橋耕一

【編集長】 吉岡正廣

【印刷・発行】 衆議院事務局 憲政記念館

〒100-0014 東京都千代田区永田町 1-1-1

TEL : 03-3581-1651 FAX : 03-3581-7962